ショックに負けることなく仲間と一緒にボランティアに取り組む

みやぎ生協 こ～ぷ委員会

みやぎ生協では、コープ・ボランティアセンター（CVC）を拠点とした震災からの復興支援（p.9～10・コラム参照）と共に、組合員同士による助け合い、支え合いの取り組みも行なわれている。買い物で、音楽で、一歩ずつ前に進もう――。自ら被災しているにもかかわらず、多くのメンバー（組合員）が震災・津波のショックに負けることなく、仲間と一緒にボランティア活動に取り組む。その頑張りはどこからくるのだろう。震災から3カ月目を迎えた6月11日、こ～ぷ委員[※1]たちが開催したバザーとコンサートの会場を訪問した。

買い物のリハビリをしよう！支援バザーin六丁の目

地震でホコリをかぶった商品があった。「これどうしよう……」。困っていた若生明子（わこうあきこ）店長を見て、高橋朋子（たかはしともこ）さん（理事）や松木弥恵（まつきやえ）さん（エリアリーダー）たちが言った。「きれいにしてバザーで売ろう！　買い物のリハビリをしよう！」

無料で配るのは簡単だ。「でもね」と松木さんが言う。「自分で必要な物を買うということを、私たちはしていないんです」。津波はくらしそのものを奪った。松木さん自身も家を流された。「川の音を聞くのも嫌です」。しかしあるとき、テレビの津波の映像に号泣し、震災以降多くの友人が自分を引っ張っていてくれたことに気付いたのをきっかけに、何かが吹っ切れた。

被災地はいまだ震災のただ中にある。「私のようにきっかけがあって日常に早く戻れた人もいるけど、まだ戻れないでじっと畳の上に座ったままの人もいます。どこかでスイッチが入らないと日常に戻れない……」。買い物はその「スイッチ」の一つになるだろう、と言う。

支援バザー開催のもうひとつのきっかけは、エリアリーダーたちから「元気が出るイベントを開きたい」という声が挙がったことだ。

まだ多くの人が避難所に居たころ、エリアリーダーの集まりがあった。高橋さんが、そのときの様子を振り返る。「避難所生活は気を使います。みんな、言いたいことも言えない状態でつらそ

松木弥恵さん（写真左）と高橋朋子さん。「委員さんたちで仮設住宅を一軒一軒まわってバザーのチラシを配ったんです」

あいにくの雨にもかかわらず約300人が来場。義援金と売り上げの合計は36万円を超えた。

寝具に人気が集まった。敷布団カバーやシーツ、タオルケット。どれも新品、しかも格安。「安くて助かるね～」と、仮設に移ったばかりのメンバー。

「無料でお持ちください」の“おゆずりコーナー”も設置。委員やメンバーが「必要としている人に使っていただきたい」と持ち寄ったものだ。

うでした」。集まったエリアリーダーたちは泣きながら話し始めた。津波のときのこと、いまの生活のこと。そうして泣いた後、「みんなで元気になれるイベントやろうよ」ということになったのだった。

バザーの準備と運営には、六丁の目店のこ～ぷ委員20人が参加。「お弁当もないのに、みんなよく頑張ってくれてます」と、高橋さんは委員たちの頑張りを褒める。

職員も一緒にバザーを応援する。「お店の人たちのいらっしゃいませー！の声、久しぶりに聞いたね」。委員たちもうれしそうだ。六丁の目店は6月時点では改修中。営業再開は夏から秋にかけての予定。「それまでメンバーさんに六丁の目店を忘れられないようにしなきゃ」。高橋さんはそう言って、にぎわうバザー会場に飛び出していった。

再び結ばれた交流の糸 蛇田店で音楽イベント

3月11日、こ～ぷ文化鑑賞会の公演で石巻を訪れていた歌手のクミコさんは、リハーサル中に震災に遭った。裏山へ逃げ、そこで夜を明かして翌々日無事に東京へ戻ることができた。公演はかなわなかった。ところが、一度は断たれた交流の糸が、この日巡り巡って再び結ばれた。

まず「もう一度石巻に行って歌いたい」というクミコさんの願いと、石巻でボランティア活動に取り組む松本桂輔さん（石巻赤十字病院応援医師）の「石巻で音楽イベントを開催したい」という気持ちがつながった。そこに、石巻の組合員たちの「あの日聴けなかったクミコさんの歌声をぜひ生協の店で」という思いがつながり、蛇田店での音楽イベント開催になったのだった。

音楽イベントを主催した「石巻発音楽便実行委員会」の松本桂輔医師。「みやぎ生協さんに相談したら、いいですよと快諾してもらって実現できたんです。お客さんの笑顔がいいですね」

「SONGS from ISHINOMAKI ～石巻発音楽便」。コンサートには、クミコさんをはじめ、宮城にゆかりのある女性ボーカリスト、EPOさん、かの香織さん、月嶋カリンさんが出演。店内特設ステージ前の200の椅子席は満員。周囲を立ち見のメンバーとテレビ局のカメラが取り囲む。静かにリズムをとる人、一緒に口ずさむ人、そっと涙を拭く人。店内いっぱいに感動が広がる。

運営委員としてイベントの準備を進めてきたメンバーたちにとって、喜

コンサートの模様は、Ustream※2で全世界に発信された。

被災地にはさまざまなニーズ ボランティアに求められる心構えは？

6月6日、日本生協連で行なわれた「東日本大震災ボランティア支援制度（p. 12・コラム参照）・キックオフ」に出席したみやぎ生協・生活文化部福祉文化事業統括の須藤敏子さんは、みやぎ生協が立ち上げたCVCの活動を踏まえ、被災地の状況や、いま求められていること、ボランティアに必要な心構えなどについて、次のように話した。

ボランティア自身が健康で、元気であることが大前提

被災地でのボランティアには家の片付けや、泥出し、仮設住宅への引っ越しなど、さまざまなニーズがあります。被災地としては一定の人数で定期的に来ていただけると、作業の計画が立てられるため本当に助かります。また、何かをしたいけど何をしていいのか分からないと思っている方は、年齢や性別などを伝えていただき、「何でもします」というスタンスで被災地に来ていただければ、ボランティアセンターでマッチングをしていきます。

本来、ボランティアは生業に関する手伝いはしないことになっています。例えば、農家の田んぼの掃除などは生業に関係するため、一般的な

買い物後もすぐに帰らずじっと耳を傾ける人が続出。「生演奏を聴きながら買い物ができるなんて、とてもぜいたくな体験です」とメンバー。

大和きよ子理事（写真左から3人目）とエリアリーダーの皆さん。

びはひとしおだろう。「たった3カ月で音楽イベントを開催できるなんて、本当にありがたいと思いました」。長くて短い3カ月だった。渡波（わたのは）で被災したエリアリーダーは、「一時はもう生きていけないと思いました。でも生協でこういう活動をしていくことで、少しずつやっていけるようになったんです」と話す。東松島（ひがしまつしま）のエリアリーダーも「一人でいてはダメだよね」と言う。「何かやっていた方がいい。それが人のためになるなら、もっといい」と。

こ～ぷ委員会の震災復興活動が本格化するのはまだ先だ。だが、渡波店の片付けや石巻支部での炊き出し、〝おさがり市〟やオープンカフェの開催など、すでにさまざまな活動が行なわれている。

運営委員たちの大部分は、いまも避難所や仮設住宅、辛うじて残った家の2階で暮らしながら今日のイベントを手伝っている。大和（やまと）きよ子さん（理事）も家と大切な友人を津波で失った。「音楽を通じて、少しでも心が癒やされれば」という言葉は、コンサートに集まったメンバーだけでなく、一緒にボランティアに汗を流すエリアリーダーやこ～ぷ委員に、そして、自分自身にも向けられたものだろう。

（文・写真　早坂恵美）

「今日ここにお集まりの皆さん、本当にご無事で来てくださって、ありがとうございます」とクミコさん。

※1　こ～ぷ委員：みやぎ生協では約350のこ～ぷ委員会で、3,000人を超えるメンバーが「『食』や『くらし』のなぜ?」などに応える組合員活動を行なっている。
※2　Ustream：ウェブ上の動画共有サービス。

ボランティアは行なえません。しかし、消費者と生産者を結ぶ生協だからこそ、一般の方が行なわないボランティアもできるのではないでしょうか。実際にみやぎ生協でも、職員が中心となって、ビニールハウスの〝泥かき〟などを行なっています。

壮絶な状況を目の当たりにしたり、多くの悲しみを背負った人に出会ったりすることがあるかもしれません。しかし、そのたびに感情移入をし過ぎてしまうと、自分自身の心に傷を負ってしまい、何もできなくなってしまうケースがよくあります。ボランティアに行こうと考えている人は、まずは自分自身が健康で、元気であることが大前提です。

ボランティアとして心を通わせることの難しさ

ある一人暮らしのおばあさんは、いくらボランティアが「何か手伝いましょうか?」と言っても、断り続けていました。しかしあるとき、ゆっくりと世間話をする機会があり、そのことがきっかけで、心を開いてボランティアを受け入れてくれました。手を出し過ぎない、相手のペースに合わせるなど、地元のしきたりやリズムにのっとって応援していくことも、ボランティアをうまく行なっていくためには必要です。ボランティアの人が何の気なしに踏んでしまったがれきが、被災者にとっては大切な思い出の品である、ということもあるのです。（文　野口武）